

# 20世紀の椅子たち

椅子をめぐる近代デザイン史

山内陸平 著

はじめに……………なぜ椅子なのか

二〇世紀は「椅子の世紀」であった。  
人間が座るといふ道具にすぎない椅子がこれほど多彩に展開された時代は過去になく、椅子は「二〇世紀という時代を映す鏡」である。

近代デザイン誕生の当初から、椅子はその時々の時代背景（思潮や世相）と科学技術を両輪として「時」を映す鏡のように生まれた結果、身近な「モノ」を通して二〇世紀のデザインを語るとき、「椅子」をおいてほかにない。

エジプト時代の玉座を例にあげるまでもなく、椅子という道具は人類の歴史とともに生まれ、その基本的な機能は「人間が座る」という単純で変わることもないものにもかかわらず、なぜこれほどまでに「意味のある道具」として存在感を示すのだろうか。

これまで「椅子」について、その意匠やデザインの解説はもとより歴史の変遷、機能や身体との関係性、また、その形而上のセマンティック（意味論的）な豊饒性や形態論について数多く語られ、さらに椅子の持つ隠喩的な意味から、しばしばアートの対象にもなってきた。

これらに加えて、椅子は人間の「空間的なアイデンティティ」に関わる道具であることが他の「モノ」と異なる点である。子どものころ椅子の周りを歌に合わせて歩き、合図とともに椅子を奪い合うという「椅子取りゲーム」は誰もが経験した遊びであろう。私がシカゴでの学生時代、講義に触れる機会を得た文化人類学者のE・T・ホール<sup>1)</sup>の名著『かくれた次元』では、動物の「なわばり」や「個体距離」について論じられているが、椅子は人間の個体空間を形成する唯一の道具（モノとしては座布団もあるが）である。このように椅子は「人間の存在」「空間的なアイデンティティ」に関わるがゆえに、空間内での椅子の位置、さらにそれらの配置関係は多くの意味を持ち、空間心理学においても考察対象となり、商業施設では営業成績に関わる重要な要素となってきた。

二〇世紀になり大変貌を遂げた椅子が、今日でも膨大な種類と数量が世界中でつくられ続けている現実を見ると、「よくもここまで」と感じ入る。八〇年代からの事務用椅子の飽くなき開発競争。また、骨董品のようにコレクションの対象とする若いマニアックな人たちを見ていると、彼らにとって椅子は計りしれない魅力秘めた「アイコン」にまでなっているかに見える。

私がモダンデザインの椅子と初めて出会ったのは大学二年生の初夏。木造校舎で、冷房などの存在すら知らず、夜ともなれば蛙の合唱を聞きながらイームズのFRPの椅子を実測・作図するという課題のときであった。その後一九五〇年代末から六〇年代の初頭には、美術館や百貨店で開催される展覧会で当時の世界的に著名な椅子を美術作品のように眺めたものである。

これらの名品に使用されている現場で出会ったのは六〇年代半ばのアメリカで、中でもイリノイ工科大学・クラウンホールでのバルセロナチェアとの遭遇は衝撃的であった。ミース教のご本尊（巨匠・ミースが設計したクラウンホールを私がミース教の本堂と呼ぶのは、イリノイ工科大学の建築科では建築を学ぶというのはミースの建築を学ぶことであり、学期末の展覧会ではミース流のオンパレードで、そこに鎮座するミースの胸像はご本尊そのものであったからだ）が見つめる中で、触ることすらできなかったバルセロナチェアと学生が実習の合間に戯れている光景は今も忘れ難い。モダンデザインの椅子との原風景である。もう一点、駆け出しのころには考えも及ばなかったが、アメリカのデザイン現場に入って初めて知ったデザインと製造・販売との関係である。今でこそ当然至極のことだが、企業におけるマーケティングやビジネスモデルなどの展開手法、さらに椅子と社会システムの関係性に瞠目させられ、表層的な造形の奥にある「これぞデザイン」というべきものは、私のデザイン活動の原点となっている。

本書は、「大阪府家具連合会」（大阪の家具の製造から卸・小売業のすべてを束ねた組織）が発行する機関紙『家具タイムズ』に二〇〇三年から九年余りにわたり「私の出会った一〇〇脚の椅子」として連載してきたものを加筆・補正したものである。したがって、家具の製造・販売に関わる経営者から若い人たちまでを

対象に、二〇世紀の椅子がどのような背景から生まれ、発展してきたか、またそれらが登場したときの状況、さらに私が初めてそれらと出会ったときに、いかに対峙し、感動したかを知ることができるだけわかりやすく書こうとしてみた。

私は椅子の研究者ではない。一九六〇年以來、建築からインテリアや家具、照明器具などの製品から鉄道車両などさまざまなデザイン実務に携ってきたが、椅子も特注品からメーカーの量産品、それも住宅用からオフィスの事務用椅子、屋外用のベンチから船舶・車両用の椅子までおよそ椅子のデザインならなんでもやってきた。したがって、本書で取り上げた椅子には多くの示唆を受けたが、六〇年代以後の椅子については先を越された思いや時には対抗心を掻き立てられる対象でもあった。そうした想いもあって、本書はデザイン実務者の体験的「椅子物語」である。

巷にモノがあふれ、お金でなんでも手に入れることができる昨今、二〇世紀の名品も散乱し、現在の経済状況では買える価格となる一方、ジュネリック品と称して形態はもろんのことオリジナルの意図する質やディテールの異なる粗悪なものも急増する。それを見間違え若い人たちを見ると、彼らのモノに接する感覚が私などとはまるで違うことを実感するが、一脚の椅子であっても、モノがなく、貧しい時代に育った私などは、最初に雑誌で出会い、また現物に触れたときの感動は忘れ難く、今でも格別の記憶として鮮明によみがえる。

アメリカ・ミッドセンチュリーの最盛期にその誕生やさまざまな現場に立ち会えたことは、幸せな時代との遭遇だったと感謝せずにはおれない。

1— E.T.ホール (Edward Hall 一九一四—二〇〇九) は著名なアメリカの文化人類学者で、多くの大学で教鞭もつたが、筆者がイリノイ工科大学在学中には教授として在籍。その代表的な著書に『The Hidden Dimension』(『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行訳、みすず書房)のほか『The Silent Language』(『沈黙の言葉』日高敏隆・長井善見・斎藤美津子訳、南雲堂)などがある。

## 目次

- はじめに………なぜ椅子なのか…3
- 選定の基準と記載内容…11
- 1 近代デザインの原点として  
シエーカーの椅子…12  
豊かさとは…14
- 2 ミヒヤエル・トーネットの14番の椅子…16  
近代を示唆した椅子に座した日々…18
- 3 ロッキングチェアの代表として  
ミヒヤエル・トーネットのロッキングチェア…20  
耽美なウィーンの曲線…22
- 4 アウグスト・トーネットのウィーンチェア6009番…24  
曲木から鋼管へ——ル・コルビュジエの矜持…26
- 5 チャールズ・レニー・マッキントッシュのハイバックチェア…28  
こんなモダンな椅子が、どうして一〇〇年以上も前に…30
- 6 オットー・ワグナーの郵便貯金局のスツール…32  
近代を形にした一脚…34
- 7 ヘリット・トーマス・リフトフェルトの  
赤と青の椅子とジグザグチェア…36  
直線と矩形で形づくったモダニズムのアイコン…38
- 8 マルセル・ブロイヤールのワシリーチェア…40  
パイプが生んだパウハウスのアイコン…42
- 9 ミース・ファン・デル・ローエのキャンティレバーの椅子、  
MRチェアとブルーノチェア…44  
近くて遠かったファンズワース邸…46
- 10 ル・コルビュジエ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアンの  
背が自由に動く椅子「LC1」と  
傾きが連続的に変わる寝椅子「LC4」…48  
オブジェと化した椅子…50
- 11 ル・コルビュジエ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアンの  
安楽椅子「LC2」「LC3」…52  
ひとり占めしたロンシャン…54
- 12 マルセル・ブロイヤールのチェスカチェア…56  
一九二五年ごろからの喧騒——キャンティレバーの椅子をめぐって…58
- 13 ミース・ファン・デル・ローエのバルセロナチェア…60  
バルセロナチェアが求める空間…62
- 14 ヨーゼフ・フランクか、ヨーゼフ・ホフマンの  
トーネット社の「A811」…64  
表舞台に登場しないが、二人のヨーゼフによるトーネット社の名品…66
- 15 アルヴァ・アアルトの「No.41」(バイミオモデル)…68  
アルヴァ・アアルト、フィンランドのアイデンティティ…70
- 16 モーエンス・コッホの折りたたみ椅子(MKチェア)…72  
リ・デザインの播盤…74
- 17 アルヴァ・アアルトの一連のスツールと小椅子…76  
自然に無理なく建てられたコッコネン邸…78
- 18 ブルーノ・マットソンの「エヴァ」…80  
時を越えたしなやかなシルエット…82
- 19 フランク・ロイド・ライトの  
ジョンソン・ワックス社のための事務用椅子…84  
巨匠のかわいい椅子…86
- 20 コーレ・クリントのチャーチチェア…88  
デンマーク流リ・デザインの原点…90
- 21 エリック・グンナール・アスブルンドの「イエテボリー」…92  
今、なぜアスブルンドなのか。  
復刻されたアスブルンドの椅子をめぐって…94
- 22 ジョージ・フェラーリー・ハードイラのハードイチェア…96  
一脚のコピーの意味…98
- 23 アルミの薄板をプレスして背と座を一体とした  
ハンス・コレーの「ランディ」からのアルミの椅子の系譜…100  
一九二〇年代から日本でも模索された鋼管やアルミの椅子…102
- 24 フィン・ユールの「NV45」…104  
落水荘でのフィン・ユール…106
- 25 チャールズ・イームズのブライウッドチェア  
「LCW」「DCW」「LCM」「DCM」…108  
「群れ」をなした椅子の様相——さんざめく三次元の曲面…110
- 26 ハンス・ウエグナーのピーコックチェアと二つの大型の椅子・  
フラッグハリヤードチェア、ジ・オックスチェア…112  
空間の「かたち」を決める…114
- 27 エーロ・サーリネンのウームチェア…116  
アメリカ近代デザインの郷…118
- 28 チャールズ・イームズのFRPのシェルチェア…120  
夢、その実現に向けて…122
- 29 フィン・ユールのチーフティン・チェア…124  
シカゴでフィン・ユールに学ぶ…126
- 30 オーレ・ヴァンシャアの肘掛椅子「No.149」…128  
手で「想い」を伝えたころ…130
- 31 ハンス・ウエグナーの「ザ・チェア」…132  
大学生活を支えてくれた恋人…134
- 32 ポーエ・モーエンセンの「J・39」とハイバックの安楽椅子…136  
古いもの持つ力、椅子の力…138
- 33 ペーター・ヴィッツと  
オーラー・ミュルガード・ニールセンのAXチェア…140  
若き日の無謀な挑戦…142
- 34 ハンス・ウエグナーのYチェア(CH・24)…144  
座ることだけではなかったYチェア…146
- 35 ロビン・デイのラウンジチェア「No.658」…148  
「見える」とは…150
- 36 ジオ・ポンティの「スーパージェーラ」…152  
軽さへの憧憬…154
- 37 ニールス・O・ムラーの一連の小椅子…156  
平凡の中の非凡、企業理念を表出させたモノづくり…158
- 38 ハリー・ベルトリアのステイルワイヤー・メッシュを  
シェルとした一連の椅子…160  
空気をデザインしたアーティスト…162
- 39 アルネ・ヤコブセンの成型合板による  
アントチェアとセブンチェア…164  
半世紀にわたってつくられているデファクトスタンダード…166
- 40 フローレンス・ノールのソファ「No.67」と  
ラウンジチェア「No.255」…168  
近代デザインへの進取の極み…170

41 オズワルド・ボルサーニの「P40」…172  
可変する椅子からデザインマネジメントへ…174  
42 シャルロット・ペリアンのペリアンチェア…176  
ペリアンの棚との邂逅…178  
43 フランコ・アルビーニの「ルイザ」…180  
近くに感じたイタリアだったが…182  
44 ポール・ケアホルムの「PK22」と「PK24」…184  
デンマークの奇才、その気品に満ちた造形…186  
45 ジョージ・ネルソンのマシマロソファ…188  
ネルソンのベストデザインは「ネルソン」…190  
46 柳宗理のバタフライイスツール…192  
グローパーリズムの中、日本の椅子は？…194  
47 チャールズ・イームズのラウンジチェア「No.670」…196  
青春の証…198  
48 エーロ・サーリネンのチューリップチェア…200  
空港から香りが消えた日…202  
49 カステイリオ・ニ兄弟の「メツァードロ」…204  
モノを「見て取る力」…206  
50 アルネ・ヤコブセンのスワンチェアとエッグチェア…208  
貧乏旅行の果てに再会した憧れ…210  
51 チャールズ・イームズのアルミナム・グループ…212  
アメリカ・ミッドセンチュリーの「椅子の中の椅子」  
—— 製品在庫のない椅子…214  
63 ガエ・アウレンティの「ロクス・ソルス」…260  
世に出て、認知されるデザインとは…262  
64 イエンス・ニールセンの「ラミネックス」…264  
究極のアセンブリー…266  
65 チャールズ・ボロックの事務用椅子「12E1」…268  
「ふっくらした形態」が暗示したもの…270  
66 オリヴィエ・ムルグの「ジン」と人型の椅子「ブルーム」…272  
万博の残したもの…274  
67 エーロ・アールニオのボールチェア…276  
デザインを観光資源にしたヘルシンキ…278  
68 ウォーレン・プラットナーの「プラットナーコレクション」…280  
インテリア・アーキテクト、ウォーレン・プラットナー…282  
69 リチャード・シュルツの「レジャークレクション」…284  
社員をスターにしたフロレンス・ノールの慧眼…286  
70 ウィリアム・ステイヴンスのサイドチェア…288  
六〇年代の「Knoll」、その黄金時代のデザインマネジメント…290  
71 ジョエ・ロンボの「ユニバーサル」…292  
六〇年代、ミラノからの咆哮…294  
72 ヴェルナー・パントンのパントンチェア…296  
テクノロジーによって生まれ、変遷したパントンチェア…298  
73 ピエール・ボーランの「タン」…300  
自由な造形へのテクノロジ…302  
74 デ・パス、ドゥルビーノ、ロマッツィの「空気の椅子」フロウ…304  
椅子に詰め込まれた空気と周囲の空気…306

52 ボーエ・モーエンセンのスパニッシュチェア…216  
キンベルでのモーエンセン…218  
53 剣持勇の「籐の丸い椅子」…220  
ジャパニーズ・モダン、その嚆矢…222  
54 長大作の低座椅子…224  
一九六〇年、浮かせた大きな丸い座…226  
55 チャールズ・イームズのタンデム・シーティング…228  
六〇年代、アメリカらしさの象徴…230  
56 ジョージ・ネルソンのスリングソファ…232  
わが師ネルソンとその事務所…234  
57 ヨーゲン・カストホルムとブレベン・ファブリシウスの  
「シミター」(63)…236  
踏み外した国際舞台への足がかり…238  
58 グレーテ・ヤルクのGJチェア…240  
幻の男と女の椅子…242  
59 マルコ・ザヌーゾとリチャード・サパーの子ども用椅子…244  
科学技術の生かしたところ、バケツと椅子の違い…246  
60 紙という素材の代表として  
ピーター・マードックの子ども用椅子「スポッティ」と  
日本の椅子から渡辺力の「リキスツール」…248  
紙の椅子、モノを使い捨てた時代…250  
61 デーヴィッド・ローランドの「GF40/4」…252  
一脚の椅子に人生をかけたデザイナー…254  
62 ドン・アルビンソンのスタッキングチェア…256  
時代が生んだ造形…258  
75 ガッティ、パーオリニ、テオドロの「サッコ」…308  
一九六八年に誕生した「豆袋」の椅子、ザノッタ社あつての「サッコ」…310  
76 ヨーン・ウッツォンの「システム・シーティング」  
あるいは「イージーチェアとフットスツール」…312  
一九六八年、パーツが織りなす華麗なシステムに  
込められたシドニーへの思い…314  
77 ヴィゴ・マジストレッティの「セレーネ」…316  
鮮やかな「みどり」に魅せられて…318  
78 アフラ&トビア・スカルパの「ソリアナ」…320  
父・カルロの継承から独自性へ…322  
79 ガエターノ・ペッシェの「UP」シリーズ…324  
異端のクリエーター…326  
80 折りたたみ椅子の代表として  
ジャンカルロ・ピレッティの「プリア」…328  
ポストモダニズムがデザインを荒廃させた…330  
81 アンティ&ヴオツコ・ヌルメスニエミのラウンジチェア「No.004」…332  
衣服を纏った椅子と、忘れたくない幻の一脚…334  
82 ヨハン・ホルトとヤン・ドラランガーの「スタンス」…336  
ジーンズのハートを持つ椅子「スタンス」、その成立した時代…338  
83 フランク・ゲーリーのダンボールを素材とした  
ウイグル・サイドチェア…340  
驚嘆され続けたゲーリーとその椅子たち…342  
84 ヴィゴ・マジストレッティの  
「マールンガ」と「シンドバッド」…344  
マジックのように姿を現し、消えた椅子…346

85	ゲルド・ランゲの「フレックス」… 348 木とプラスチックの共演… 350
86	パオロ・デガネッロ(アーキズーム)の「アエオ」… 352 六〇年代末、イタリアの新たな鼓動… 354
87	国際的ビジネス戦略の代表として エミリオ・アンバーズとジャンカルロ・ピレティの 「ヴァーテブラ」… 356 椅子、その国際的ビジネス戦略… 358
88	マリオ・ペリーニの「キャブ」… 360 「人」との関わりから生まれる椅子… 362
89	ピーター・オプスウィックのバランスチェア「バリアブル」… 364 覆った「座る」という概念… 366
90	アンナ・カステリ・フェリエーリのスツールグループ… 368 ジョイント部材を座にした椅子… 370
91	コンピュータ時代の事務用椅子を代表して ウィルクハーン社のラウス・フランクとヴェルナー・ザウアーの 「FSフライ」… 372 一九七六年、事務用椅子が動き出した… 374
92	ルッド・チューゲセンとジョニー・ゾーレンセンの 8000番シリーズ… 376 クラフトを越えた木のぬくもり… 378
93	マリオ・ボッタの「セコンダ」とパイプを主材にした二連の椅子… 380 記憶を呼び覚ましたボッタの椅子… 382
94	ポストモダンの椅子を代表して ミケレ・デ・ルッキの「ファースト」… 384 八〇年代に吹いた「ポストモダン」というつむじ風… 386

## 選定の基準と記載内容

本書は大阪府家具連合会が発行する機関誌「家具タイムズ」に二〇〇三年七月〜二〇一二年二月まで「私が出会った一〇〇脚の椅子」として連載されたものを加筆・補正したものである。

数ある近・現代の椅子の中からデザイン史を代表する椅子を選ぶというのは至難の業である。連載途中から「椅子をめぐる近代デザイン史」として客観的にとらえようとして、選ぶ基準を以下のように設けた。

選んだ中には個人的なこだわりの椅子もあるが、近代デザイン史上で取り上げなければならぬものは加えた。したがって、「椅子をめぐる私の近代デザイン史」といえるものとした。

また、二〇世紀の椅子の辞書にもなりうるものとして、単に有名なものだけではなく、できるだけ多くの視点で選び、中には歴史の闇に消えていくような椅子についても取り上げた。なお、その都度選定した理由も記してあるが、具体的なことは以下のとおりである。

95	マッシモ・ヴィネリの「ハンカチーフ」… 388 風に舞ったハンカチ… 390
96	アルベルト・メダの「ライト・ライト」… 392 二〇世紀の最後に誕生した革新的な椅子… 394
97	ウィリアム・スタンフとドナルド・チャドウィックの アーロンチェア… 396 事務用椅子は「マシーン」なのか?… 398
98	ヨハネス・フォアサムとピーター・ヨルト・ローレンツェンの キャンパスチェア… 400 「北欧のアイデンティティ」で世界を制覇する… 402
99	フィリップ・スタルクの「ロード・ヨー」と ロン・アラッドの「トム・バック」… 404 デザインの存在意義と評価… 406 * 一九六〇年代、アメリカで学んだものは 「デザインマネジメント」… 408 おわりに… 410 主な参考文献… 412 図版の出典・提供者・写真撮影者… 415

・椅子はあくまで人間が使う道具である。したがって、第二次世界大戦以後（一九四五〜）は、一部を除いてある程度の数量が計画的に生産され、使用されたものを前提としている。ただし、一九四五年以前、椅子を計画的につくるといことがなかった時代のもは、近代デザイン史上、あるいはデザイン思潮においてエポックとなったものや復刻生産されたものを対象とした。

・造形、素材、構成、製造技術などで同類のもの極力年代が先のものを選んだが、オリジナルとして造形を含め完成度の高いもの、あるいはその後と与えた影響力の大きさを選んだものもある。また、多様な素材（紙など）やアセンブリ方法が特異なもの、それらの先駆けとなったものも選んだ。

・九九の項目としたことに特段の意味はない。発売時に注目され、造形の美しさやユニークさなどの点からあと二〇脚ぐらいは「二〇世紀の椅子」として加えるべきと考えるが、本書では割愛した。

・椅子というと、ほとんどの書物では住居用というか、一般的な椅子のみを扱うが、これ以外に屋外用や車両・船舶などの移動空間用の椅子、さらにある種の人にとっての人生で最も長時間使用するものにオフィスでの事務用椅子がある。事務用椅子に関して言えば、これだけで二〇世紀初頭からの系譜をたどるべきものであるが、椅子に関わる研究者は取り上げることがあまりない。本書では屋外や公共空間のための椅子に加え、事務用椅子としてフランク・ロイド・ライトの椅子にはじまる代表的なもの数脚を取り上げた。

・本文はテーマとした椅子について概説とエッセイの二部構成からなり、概説では作者の略歴に加え、テーマとした椅子の概要とともに関連するほかの仕事についても記し、選んだ椅子の周辺事情も明らかにしようとした。エッセイ部分はその椅子に出会ったときの感動やそれにまつわる体験などの個人的な説明を綴り、その椅子の理解を助けるように努めている。

・歴史の変遷の理解を助ける意味から掲載順序は年代順としたが、エッセイ部分には九年余りの時間的ギャップがあり、初出の時期を文末に明記した。

・同一作者が複数回にわたって登場する場合、最初の稿で作者の略歴などの概要も記し、以後はテーマとなった椅子について記してあるので、合わせて参考にしていただきたい。

・数人の作者とは直接疑問点などを情報交換し、新情報やこれまで知られていなかった事実も明らかにしている。

・椅子の製作年（デザイン年）に関して資料によって異なるものがあり、可能な限り精査して明記したが、それでも差異があることをお断りしておく。

・本書の題名を「20世紀の椅子たち」としたが、近代デザインへの流れとして重要な、19世紀以前のシェーカーやトーネットの椅子も加えた。

ル・コルビュジェ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアンの安楽椅子「LC2」「LC3」

1928



●「LC2」(1928)



●「LC3」(1928)

デザイン：ル・コルビュジェ (Le Corbusier 1887～1965)、  
ピエール・ジャンヌレ (Pierre Jeanneret 1896～1967)、  
シャルロット・ペリアン (Charlotte Perriand 1903～1999)  
製造：1930年からトーネット社 (Thonet)。1965年からカッシーナ社 (Cassina) で復刻

ル・コルビュジェがデザインした椅子の中で、現在でも普通に使われる椅子が「LC2」と「LC3」の安楽椅子である。この二つは、高さと同横幅の寸法、座部のクッションの構成が異なるぐらいでほとんど同じデザインといってもよい。カッシーナ社によって一九六五年に復刻された「LC2」は一人掛け、二人掛け、三人掛けの三種類。横幅が大きい「LC3」は一人掛け、二人掛けの二種類がある。

太さの異なる二種類のパイプで構成された「支持する部分」と、複数のクッションからなる「支持される部分」との二分法による構成は、細いパイプとマッシュパッドなクッションとの対比によりさらに明快となり、ル・コルビュジェの合理主義の理論が表現された二〇世紀の名品である。

現在の視点でこれらを見ると、フレームにクッションを置いて安楽椅子にするという構成はごく一般的に見られるが、当時としては革新的で、このような構成の椅子はこれ以前にはなく(一年遅れてミースのバルセロナチェアがある)、六〇年代以後の日本で一般化した「置きクッションタイプ」の先駆けである。また、一九三五年になってパリの自邸のためにデザインされたという長椅子「LC5F」は、同じ置きクッションでも背のクッションが三個に分かれ、長さの異なる長椅子にするというル・コルビュジェのシステマ的思考が読み取れる。

現在、カッシーナ社で復刻された「LC2」と「LC3」のクッションは硬いしかりとした革張りであるが、プロトタイプでは羽毛を詰めたソフトなものであったという。その上、パイプに色のラッカーが塗装されたものもあり、プロトタイプのようなソフトなクッションと色鮮やかなパイプの構成で復刻されていれば八〇年代からの椅子のカジュアル化の先駆けであったと考えられ、この現代性は驚くべきものである。

ピエール・ジャンヌレとシャルロット・ペリアンという協力者がいたといっても、ル・コルビュジェが二一世紀にまで息づく椅子(「LC1」「LC8」)をたった一年間でデザインしたことは驚嘆するほかはない。

1 横山正訳『現代の家具シリーズ2、ル・コルビュジェの家具』(エー・ディー・エー・エディタ、一九七八)



●「LC3」の試作段階での原型



●「LC2」のオリジナルに近いバージョン。パイプはブルーグレーのメタリックなラッカー吹付け。クッションは羽根を詰めた革張り



●右のフレームにクッションを置いた「LC2」



●「LC2」のフレーム



●「LC5F」(1935)



●ル・コルビュジェの住宅の代表作、サヴォア邸(1931) ①

## ひとり占めしたロンシャン

ル・コルビュジェという建築家を知った中学生のころから、ロンシャンの教会を一度見てみたいという夢にも似た気持ちを抱き続けて一〇年以上経った。

一九六七年、アメリカ留学からの帰路。ヨーロッパで見た建築の一つにあげてはみたものの、どこにあって、どうして行けばよいのか見当もつかなかった。今ならそんな情報は巷にあふれているが、当時は皆目わからず、ニューヨークの本屋で立ち読みをして情報を採ってはみた。最後はスイスのベルンまで行けばなんとかなるだろう、という安易な気持ちでニューヨークを発った。

ヨーロッパを旅する途中、パリの空港でロンシャンの教会が描かれた切手を偶然見つけ、さすが切手にもなるのかと感嘆し、記念に一枚だけ買って小さな手帳に挟み込んだ。このことが後に大いに役立つことになるとは知らずに。

真冬の早朝、といっても暗闇の中、ベルン駅前の安宿を逃げるように出て汽車に飛び乗った。前夜にいくら調べてみても午前中にロンシャンに着く汽車はこれ以外には見当たらなかったからである。

霜晨そうじんのロンシャン駅。人影のないプラットフォームに一人降り立ち、汽車を見送ると、吐く息のみが白くあたりの空気を動かす。ただただ寒かった。木造の小さな駅舎では、白髪交りの年老いた駅員が一人ストープに石炭をくべていた。

これからどうして行けばよいのかもわからず、英語で話しかけてみたがもろん通じるわけがない。大学時代泣き泣き単位を取った程度のフランス語では全く役に立たない。とっさにパリで買った切手を思い出し、「ここへ行きたい」と指し示して、手話まがいの会話がはじまっ

た。老人は得意げにすぐさま行くべき方向を指差してくれたが、「まだ暗いし、寒いからもう少しストープにあたっていけ」と言う。いや、そう言っているらしい。お互いストープに手をかざし、沈黙の合間に手話と英語とフランス語の不思議なコミュニケーションを続けながら日が昇るのを待つこと一時間余り。しらじらと夜が明けはじめたころ、駅前の小さな店の扉があくのを待つてパンを一つ買い、礼を述べて、お爺さんが示してくれた方向へ歩を進めることにした。だが、本当にこの先にあるのだろうかと心配になった。それほどどの勾配ではないが山道、聞きたくてもあたりに人家も人影もない。不安を覚えながらもゆっくり歩くこと二〇分ぐらいであったらうか、丘の上にそれらしき姿が小さく見え隠れしてきた。思わず「あった」と呟き、駆け出していた。

冬の朝日に照らし出されたロンシャンの教会はたとえようもなく美しく、丘の上に展示された巨大な野外彫刻を見るように周囲を歩き、堪能するまで眺め回した。折しも扉には鍵がかけられていなかった。内部に入ると、そこは無数の窓からの光が奏でる私一人のなんとも贅沢な演奏会場と化し、どこからともなく聖歌隊の歌声が聞こえるような錯覚さえ覚えていた。後にも先にも、世界的な名建築といわれるものをひとり占めできたのはこのとき限りである。

「意味するもの」として朝日に映える外部と、一転して、無数の窓からの光と影による「意味づけられるもの」としての内部空間。感動覚めやらぬ中、ゆっくりと丘を下りながら、「支持する部分」と「支持される部分」によって構成された安楽椅子「LC2」「LC3」を思い起こしていた。

今当時は振り返ると、ロンシャンの駅からどうして、どこへ行ったのかも思い出せない。興奮していたのか、その日の夜は汽車を乗り継いでパリまで帰ったのだろうか……。

(初出 二〇〇四年一月)



ロンシャンの教会へ行く道



筆者がパリの空港で買ったロンシャンの切手 (1967年ごろの切手)



筆者が訪れたとき、朝日に映えるロンシャンの教会



# 39 アルネ・ヤコブセンの成型合板による アントチェアとセブンチェア



▲ 背部の形状の違いにより多くのバージョンがある①



▲ クヴァドラ社のテキスタイルを纏ったセブンチェア（クヴァドラ社にて）



▲ フリッツ・ハンセン社でのセブンチェアの製作現場



▶ 年代順に並んだ小椅子『モビリア』のNo.323（1984年）の表紙



▲ アントチェア誕生の契機となったノヴォ社の食堂①



▲ セブンチェア（1955）



▲ アントチェア（1952）

デザイン：アルネ・ヤコブセン（Arne Jacobsen 1902～71）  
製造：フリッツ・ハンセン社（Fritz Hansen）

## 1952 1955

アルネ・ヤコブセンは一九〇二年デンマークのコペンハーゲンで生まれ、王立芸術アカデミーで建築を学ぶ。一九一九年、「未来の家（The House of the Future）」という円形住宅を発表して以来、建築を中心に活動する一方でインテリアや家具、照明器具、テキスタイル、雑貨など幅広い分野のデザイン活動によってデンマークのミッドセンチュリーモダンを主導した。一九五六年から六五年までの間、王立芸術アカデミーの教授でもあった。

建築の主な仕事では、多くの住宅のほか、オルフースの市庁舎（一九三七～四二）、エッグチェアやスワンチェアが誕生するきっかけとなったSASロイヤルホテル（一九五六～六二）などがある。

アントチェアは、一九五二年ノヴォ社（Novo）の社員食堂のためにデザインして二〇〇脚がつくられたのを契機にフリッツ・ハンセン社で量産されることになった。最初は三本脚でスタッキングを可能にした椅子であったが、ヤコブセンの没後、四本脚のバージョンもつくられている。当初は座と背が一体となる成型合板の技術が十分でなく、部分的にクラックが入るのを黒色の塗装でカバーしたところ、その形状が蠅（*fly*）に似ているところから「アントチェア」とも呼ばれるようになったという。背の途中にあるくびれた部分は五〇年代のファッションにも通ずるユニークな形態。

セブンチェアは、一九五五年ロドヴィル市庁舎の設計時にアントチェアのファミリータイプとしてデザインされ、その後は背の形状や肘の有無など多くのバリエーションを生み、これらは「シリーズセブン」として今日まで五〇〇万脚以上もつくられ、現在ではさまざまな色に塗装されたものや布張りのバージョンもある。

このほか、形状の異なるバージョンとして、ミラノのトリエンナーレで受賞した「グランプリチェア」（一九五七）や「3130」「3108」などその種類も多いが、すべてアントチェアのファミリーである。

これらは木を素材としながらも、それまでのデンマークのクラフトマンシップによる椅子づくりから脱し、三次元の合板とスティールパイプによって量産化を可能とし、世界中でベストセラーとなった。座と背が一枚の成型合板でできた椅子のデファクトスタンダードである。

▶1 二〇〇九頁参照。

▶2 「デンマークのデザイン誌『モビリア』のNo.323（一九八四）で「As Time Goes by」として、アントチェアとそれ以後の異なるバージョンが並べられ、表紙デザインとなった。

日本のデザイン振興策であるGマーク制度が誕生したのは一九五七年。すでに半世紀以上になるが、今も名称を「グッドデザイン・アワード」と変え、続いている。モノのデザインがこれほど成熟した現在にどれほどの意味があるのか全くわからないが、その中に「ロングライフデザイン賞」というのがある。その基準として一〇年間使い続けられたモノを顕彰しようというもので、この制度自体がすでに使命を終えた「ロングライフ」なのだが……。

それに比し、半世紀以上の時を経て今日も世界中で使われているのがヤコブセンのセブンチェア。「ロングライフデザイン賞」の基準で、なんと言えばよいのだろうか。この制度以前にくられ、生産された数も桁外れだから「バケモノ賞」とでもすべきかもしれない。

これには、使用範囲の広い汎用性、さほど高くない価格、つくる企業が世界に市場を持ち、高い技術力とデザインに対する真摯な姿勢、この四点に加え、素直で飽きの来ないミニマルな造形（デザイン）と製品としての完成度が重なり合ったとき初めて可能となるのだが、セブンチェアはこの条件をことごとく満たし、製造されはじめて半世紀以上になるが、世界中で使われている。わが家のセブンチェアも三〇年以上になるが、表面のチークに味が出てきて健在だ。

成型合板という木の加工技術が生まれたときから、イームズだけでなくデザイナーなら誰もが模索した座と背が一体となる椅子。それは必然の方向でもあったのだが、課題は座と背の間の曲がった部分の強度。さらに、座や背に少しの三次元の曲面をつけたいという課題に技術が伴わず、一九四〇年代にはなかなか決定的な椅子が誕生しなかった。一九五二年になって、フリッツ・ハンセン社の技術とヤコブセンの造形が結び付いた結果、成型合板による小椅子の典型が生まれた。以来、どれほどコピーヤリ・デザインが出てこようが、それらは生き残れず消

えていった歴史からも明らかのように、ヤコブセンのアントチェアからはじまる「シリーズセブン」は一種のデファクトスタンダードである。<sup>1)</sup>

イームズは成型合板をシェルの椅子にしようとしたが、技術的な問題からFRPというプラスチックで実現させた。イームズに影響を受けたヤコブセンが背と座が一体となる椅子を木で完成させたのは皮肉である。が、思想（発想）とテクノロジー（科学技術）が結び付いたところに新たな椅子が生まれてきたという意味で、二〇世紀における椅子の典型でもある。

学生時代からフリッツ・ハンセン社の名前をよく耳にしていたのはヤコブセンあってのこと  
で、一度は訪れてみたいと考えていたところ、たまたま実現したのが一九八〇年。コペンハーゲン郊外の工場へ着いた途端、「ここがフリッツ・ハンセンだ」と言われても信じられなかった。なんの看板もないし、煉瓦造の平屋の事務所。正直、これが世界のフリッツ・ハンセン社かと。芝生の中、タンポポの咲く前庭の片隅にあった小さな「入口」を表わすサイン。赤い矢印の上に「FRITZ HANSEN」の文字が見え、やゝとこのことで納得する。ポール・ヘニングセンのランプが下がるエントランスを抜けると、廊下に「AXチェア」の解説パネル。<sup>2)</sup> さほど広くないショールームには当時のフリッツ・ハンセン社の看板商品が所狭しと並んでいた。通された部屋の入口の壁には色とりどりのセブンチェアの合板が横向きに貼り付けられていて、出入りには少々邪魔になるがおもしろいプレゼンテーション。別棟の工場ではセブンチェアの合板がそこかしこに積まれ、販売量の多さを容易に想像させた。

バリエーションが多いといってもトーネットとは比較にならないが、木を主材とし、曲木と成型合板という加工方法の差こそあれ、それらの加工技術を生かして製品化された点では同じだ。時を経て広く使われ、現在もつくり続けられている椅子として、ヤコブセンのセブンチェアとトーネットの椅子は両横綱といえるだろう。

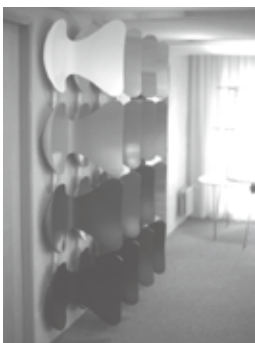
（初出 二〇〇九年五月）

<sup>1)</sup> わが国でも六〇年代になってあちこちで試みられたが、座と背の間の強度が解決されなかった。現在、成型合板で背と座が一体となった椅子はセブンチェアが代表格で、その技術は改良されながら今日に至っている。現在の製品は、九層の単板と二層の繊維からなる成型合板と直径一四ミリのスチールパイプで構成されている。塗装されたパージョンや、布張りパージョンもある。今やセブンチェアはいろいろなアレンジによってイベントや展示品などにも使われている。その一例として、デンマークのインテリアファブリックで有名なクヴァドラ社 (Quadrat) を訪れたとき、セブンチェアに自社の繊維を張りプレゼンテーションしていた（一六五頁の図版参照）。

<sup>2)</sup> 一四〇頁参照。  
<sup>3)</sup> 一四二頁参照。



フリッツ・ハンセン社の前庭にあった「入口」を示す小さなサイン



フリッツ・ハンセン社のショールームの部屋の入口にディスプレイされたセブンチェアの合板



Contact avec l'Art japonais  
Charlotte Perriand  
Tokyo 1941

▲ 右の図録の1頁目に、ペリアンのサインと坂倉準三と共同による次のような文章がある。「新しき世界創造を志し、常に果敢なる闘争を続けつつあるル・コルビュジエ並びにピエール・ジャンヌレに捧ぐ」

シャルロット・ペリアン  
坂倉準三

▲ 竹によるキャンティレバーの椅子(1941)。ペリアンが東北地方を見て回り、「竹」という素材に注目。この椅子のほかにも、竹で作られた家具や雑貨が数多く発表された①



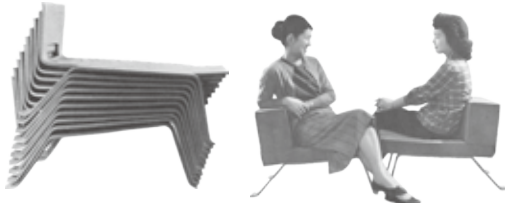
▲ ル・コルビュジエの「LC4」の竹製と考えられるシェーズ・ロング(1941)①



▲ 二人用の長椅子(1955)。座は竹の簧子張り②



▲ 1941年の「選択・伝統・創造」展の立派な図録(高島屋史料館所蔵)①



▲ 休息用椅子(1955)。立体成型合板製。左のフレームにゴムクッションの座布団を載せて使う。最近、カッシーナ社から脚をスティールにして復刻された②



▲ 「巴里1955年 芸術の総合への提案 ル・コルビュジエ、レジェ、ペリアン3人展」の図録の表紙



▲ ペリアンチェア(1955)

デザイン：シャルロット・ペリアン(Charlotte Perriand 1903～99)  
製造：1955年のオリジナルは三好木工。その後、ハードウェア商会から復刻され、一時天童木工で製造・販売されていたが、現在はカッシーナ社(Cassina)に移り、同社で製造されている

1955

シャルロット・ペリアンは一九〇三年にパリで生まれ、パリの装飾美術中央連合学校で学び、一九二七年サロン・ドートンヌに出品した「屋根裏のバー」が注目され、これを契機にル・コルビュジエの事務所に入所。以後一〇年間ル・コルビュジエの協力者として、次々と新しい素材による形態の家具を発表する。ル・コルビュジエがデザインしたとされる椅子はすべてこのころのもので、ペリアンの力が大きかったと考えられる。

ペリアンとわが国との関わりは、一九四〇年(昭和一五)に日本の商工省が輸出用工業品の指導のためにペリアンを招聘したことに始まる。来日した彼女は京都や東北地方を精力的に見て回り、日本の竹などを用いて新たな視点で家具などをデザインし、翌年(一九四一)の春に高島屋の東京と大阪で「選択・伝統・創造」展を開催。竹によるキャンティレバーの椅子やシェーズ・ロングなどを発表。当時の日本の若いデザイナーに衝撃を与えた。

一九五四年に再び来日し、五年に「造形芸術と住まいに関する分野においての芸術の総合」をテーマに「巴里一九五五年 芸術総合への提案 ル・コルビュジエ、レジェ、ペリアン三人展」を開催。このとき発表されたのが通称ペリアンチェアといわれている成型合板によるワンピースの椅子

である。この展覧会では、この椅子のほかに、飾り棚、テーブル、事務用机など数多くの家具も発表され、その斬新さは世間を驚かせた。その後はエールフランスの東京事務所やパリの日本大使館などのインテリアを手がけ、一九九八年には東京・新宿のパークタワーホールで「シャルロット・ペリアン展」が開催された。

ペリアンチェアのオリジナルは、一〇ミリ厚の成型合板でつくられたが、強度の問題から天童木工では厚みを一七ミリにして製造された。現在はイタリアのカッシーナ社に製造が移されている。この椅子のすごさは、なんといっても成型合板のワンピースからなり、スタッキング可能な形状を提示したことである。

①— この展覧会の図録はシート状のものを箱に入れたすごいもの(写真参照)。また、このときの竹のシェーズ・ロングはル・コルビュジエが一九二九年にデザインした竹製のバージョン。これは、当時の高島屋の取締役であった川勝氏の自宅に一時あったという記録があるが現在不明。  
②— 一九五五年(昭和三〇年)四月一日から坂倉準三らの協力のもと、高島屋で開催され、ペリアンチェアもこのとき展示された。  
③— 図録の中の出品目録にはペリアンチェアを「立体成型の合板製小椅子 黒色ラッカー仕上げ、積み重ねができる(日本製作)」と記されている。

ふとしたことから三五年ぶりに、ペリアンの飾り棚<sup>1)</sup>に邂逅し、突如当時のことが走馬灯のごとくよみがえった。

一九六五年、米国へ留学することが決まり、勤めていた高島屋の会長室へ部長に付き添われて挨拶に行ったときのこと。挨拶もそこそこに大きな部屋の真ん中にある間仕切り棚に見られていた。誰に言われるともなく「これはペリアンの棚だ！」と私の直感が働いたのは一九五五年の残像がどこかにあったからだろう。

この飾り棚に偶然再会したのは数年前。研究資料を収集するために高島屋史料館を訪れ、館長の案内で裏部屋をのぞいたとき。驚きで声をのんだ。そこには誰からも注目されることなくペリアンの棚が静かに佇立していた。三五年ぶりではあったが瞬時に、「これは昔、会長室にあったペリアンの棚ではないの？」と訊いてみたが、館長らは首を振るばかり。彼らの話によれば、本社移転のときあまりに大きく、さりとて捨てるのも惜しい。置く場所もないのでここに持ち込まれたが、今では史料でもなく、収蔵品のリストにも載せていないという。なんともったいないことか。だが、このとき以来世に知れ渡り、この棚を見に来る人もあると聞くと、私も役目を果たしたのかと思う。

今、一九五五年にペリアンらが高島屋で開いた展示会の図録を手にしてこの原稿を書いているのだが、つい先ごろ、昔の雑物を整理していて古びたブリキの缶が見つかり、その中に「ローマの休日」など高校時代に見た映画の黄ばんだパンフレットとともに偶然出てきたのがこの図録。青春時代が一気によみがえる。

高校時代は勉強などそっこのけで絵ばかり描いていた。戦後の困窮からようやく立ち直りは

したが、文化的催しなどはまれで、マチスやルオーなどの展示会が京都美術館であると知れば、長蛇の列に並んでも観に行ったものだ。この展示会もたまたま東京の親戚の家に行ったとき、レジエを観るのが目的であったのだろうか。そのころはデザイナーの道に進むことなど頭の片隅にもなく、ペリアンやその椅子についてほとんど記憶にないのは、情けない限りである。この飾り棚を実測し<sup>1)</sup>、図録の寸法と照合してみたが、寸法が一致するものは見当たらなかった。だが、会場で使われた作品番号四九の飾り棚と同じデザインであることから、図録の寸法の誤記なのだろう。その容姿はとも五〇年も前につくられたものとは思えない端麗で時を越えたもの。ただただそのすばらしさに唸った。さらに驚くことは、見事なノックダウン構造になっていた。驚きはこれだけではない。各段にはめ込まれた薄い板（下図の右のバツ印）が指一本で端から端までスムーズに動き、様相を変えていくのだ。

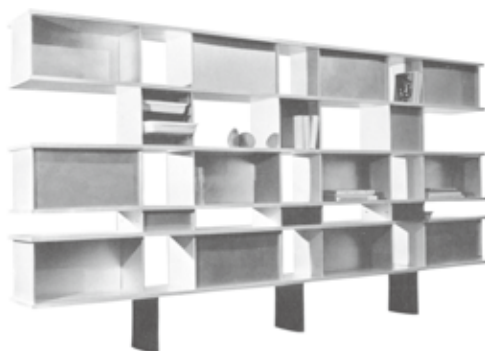
成型合板という木の加工技術を知ったのは大学を卒業して間もないころ。天童木工主催の家具デザインコンペがあるというので、なにかおもしろいものができないかと、小学生時代に厚紙に切り目を入れて折り曲げ、好きな力士の名前を書いて遊んだ紙相撲まがいのものをつくっていた。

ある日、「そんなものはある」と先輩から古びた写真を見せてもらったときに初めてペリアンの椅子を意識した。そのころは現物を見ることもできず、現物に触れたのは、一九七四年にハードウェア商會によって復刻されたからのことである。

今になって、ペリアンの飾り棚や椅子を見ると、デザインの先進性や彼女の真摯に取り組む姿勢などもさることながら、食べることがやっとなという戦後の時代にもかかわらず、日本の木工技術や職人の技にも心底から感嘆せざるをえない。

（初出 二〇〇四年九月）

1) 実測の結果は横幅三九〇〇、高さ二〇〇〇で、図録の作品番号49とは高さが異なるが、写真と照合すると同じデザインであり、寸法の誤記であったかもしれない。ノックダウン構造。隔て板と背板はアルミ板にラッカー仕上げで、これはフランス製（図と写真を参照）。



高島屋資料館にあるペリアンのデザインになる飾り棚、左頁はその実測図



実測図。右側の図の ⊗ は各段に入る薄い板（スライド戸）の大きさである。特に下から2段目の板は通常考えられないような高さで横のプロポジションであるが、左端から右端まで指一本でスムーズな引き通しが可能となり、板の位置により様相が変化する見事なデザイン